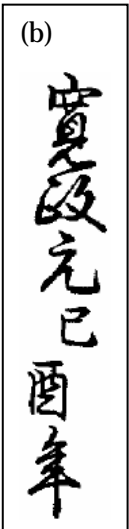


筆の流れた部分を見分ける



第2回、第3回で屋号が入った人の名前をやりましたが、その文書(「伏見通日雇頭仲間」(歴史文化情報センター請求番号は01018-7-50))を今回から読んでいきましょう。右にこれから読む部分の縮小版を載せました。「日雇頭仲間」のメンバーを列挙した後、最後にこの文章があります。



さて、(a)は最初が「右」、次の「者」は「𠂔」の部分がよくわかるのですが、中の「𠂔」が?ではないかと思えます。これは「者」という字で「は」と読みます。したがって

「右者」で「右は」。このように漢字をひらがなのように使うのは「者(は)」「茂(も)」「尔(に)」「而(て)」「江(へ)」などがよく出てきます。

(b)は年号が書いてあることはわかるとは思いますが、最初の「寛」は「寛」。次の「政」は偏の「𠂔」は「正」という字の崩しです。したがって「政」は「政」で寛政の改革などでお馴染みの「寛政」です。次は「元」、次の2文字は少し斜めに配置してありますが、干支で「己酉」(つちのと とり)

です。「己」は「つちのと」ですが、「巳」は「み(へび)」です。最後の「年」は「年」しかありません。次は拡大しませんが、「九月十三日」です。

(c)の部分は、「依」はどのように書かれているか見ると、「依」と



なっていて“筆が流れている部分”を取り除くと、「伏」です。「見

は「見」で「伏見」。次の「於」は、偏は「方」なので、「旅」?と思ってしまうかもしれませんが、この字はよく出てくる字で「於」という字です。今でも「於 会議室」というふうに使われる、場所を示す字です。「於」の次に場所が来ますが、それが(d)の「御役所」で「御役所に於て」と読みます。

(e)も特に難しい字はないと思えます。「日雇頭仲間」です。

江戸時代後半には「日雇」人足が大勢いました。「日雇頭」は現在で言えば、人材派遣会社の社長という感じでしょうか。「仲間」は「株仲間」などというふうに使われ、同業者の組合です。

